

災害後の計画的被災跡地のプレイスメイキングを通した復興に関する研究 ー東日本大震災を事例にしてー

代表研究者 近藤 民代（神戸大学都市安全研究センター 教授）
共同研究者 坂口 奈央（岩手大学地域防災研究センター 准教授）

[研究報告要旨]

本研究では東日本大震災の被災沿岸都市の計画的被災跡地で展開された復興プレイスメイキングの実態と居場所の変容を明らかにした。ここでいう計画的被災跡地とは、生活の営みがあった場所の意味が復旧・復興を目的にした公的介入によって断絶した公共空地（災害危険区域や津波復興祈念公園など）を指す。復興プレイスメイキングを場所の設え、活動、意味を再生するプロセスと定義した。

本研究で明らかにしたことは次の通りである。第2章では災害危険区域に指定された仙台市荒浜地区で実践されている復興プレイスメイキングがソーシャルキャピタルを紡ぎなおすプロセスとして機能していること、複層的な意味の束を創り上げ、それが計画的被災跡地荒浜の再生につながっていると結論づけた。第3章では津波復興祈念公園が立地する陸前高田市と石巻市を事例として居場所の変容に関するケーススタディを行った。津波復興祈念公園は現時点では多くの住民にとって居場所だとまだ認識されていないが、被災をした人々や今を生きる人々は居場所を奪われた弱い存在ではなく、災害前の場所を継承し災害後に新たな意味づけを行う、市民主体の復興プレイスメイキングに取り組んでおり、これが祈念公園の居場所化に寄与する可能性を秘めていることを指摘した。行政による場所のガバナンス、市民主体のプレイスメイキング、市全域の土地利用空間計画を組み合わせる補完関係でまちの場所性と人間の居場所を再生していく計画技術が必要である。第4章では大槌町を対象として分析を行った。新たに整備された場所は、現時点では居場所との認識が浸透しているとはいえないが、「日常の風景の一部」と捉える人が半数近くいる。被災の経験を受容し、日常に織り込みながら、地域の愛着のある場所としての意味を見出していると解釈した。